

## 講演会「杉村楚人冠から折口信夫へ」

令和4年9月25日 於 生涯学習センターアビスタ ホール

講師 安藤礼二氏（多摩美術大学教授）

私が杉村楚人冠記念館を訪れるのは三回目になる。私がテーマにしている折口信夫おりくちしのぶを追っていて、楚人冠とどういう関係が、と疑問を持たれると思うが、非常にドラマチックな、私自身予想だにできなかった導きがあり、楚人冠にたどり着いた。実は、ジャーナリストになる以前の楚人冠、まさに今回の展示（編注：杉村楚人冠記念館企画展「杉村楚人冠の青少年時代 一名ジャーナリストの原点を探る」、令和4年7月12日～10月2日）のテーマ、青年時代と非常に大きな関係を持っていた。それで今回、ここにお招きいただいた。展示も見てきたが、100年前のものがよく残っていると思う。私が以前来た時は日記を調査させていただいた。これだけ記録を残して、100年前の原稿も書簡も、真新しい感じで見ることができる、かけがえのない資料である。

近代には何人か突出した思想家、表現者が生まれてきている。杉村楚人冠はその表現者たちと実に親密な関係を築いている。卓越した表現者も自分ひとりの力では卓越した表現にたどり着くことはできず、様々な人との出会いによってその人独自の表現にたどり着く。杉村楚人冠はその媒介のような位置にいると思う。例えば私が興味を持っている禅ぜんの世界的研究者鈴木大拙すずき だいせつや、南方熊楠みなかたかまくす。楚人冠は今年生誕150年で、大拙はその2年前、熊楠はさらにその3年前に生まれている。熊楠は和歌山の先輩である。熊楠の楚人冠に宛てた非常に長い手紙が残っていて、熊楠を特徴づけるエコロジーという概念を前に出して自然保護運動を展開したとき、側面から助力する役割を楚人冠は果たしている。大拙と熊楠という二人の巨人なつめ そうせき いしかわたくぼく、夏目漱石・石川啄木とも東京朝日新聞で付き合いがある。楚人冠は思想・文学の重要な人物と密接な関係を持っている。

日記や書簡といったものは公の記録に残らない、重要なことが書かれている第一次資料である。我孫子には白樺派の人々も住んでいたが、実は柳宗悦やなぎむねよしや白樺派の人々も、大拙や熊楠の営為と無関係ではない。現在近代日本思想史ではそれが重要なトピックスになってきている。杉村楚人冠はこれまで孤立して考えられてきた偉人たちをつなぐ、媒介する役割を果たしていて、杉村楚人冠記念館に残されている一次資料の重要度はこれからますます高まっていくと思っている。明治を迎えた日本の中で、突出した表現者たちが現れた、その隠れた交友関係を解き明かす鍵が皆さんの身近なところに眠っていると思っていただいていたと思う。

今、私が協力したワタリウム美術館の鈴木大拙展（編注：ワタリウム美術館「鈴木大拙展 Life=Zen=Art」、令和4年7月12日～10月30日）をやっている。この大拙と南方熊楠は早々に日本を出て大拙はアメリカ・シカゴに、熊楠はアメリカを経てロンドンに行くが、シカゴの大拙とロンドンの熊楠が何度か書簡のやり取りをしている。その書簡自体は見つかっていないので、

どんなやり取りをしたかはわからないが、お互い無名の何物でもなかった時代に文通で交友している。熊楠の人脈からはのちに柳田国男<sup>やなぎたくにお</sup>や折口信夫といった民俗学者たちが生まれてくる、大拙の人脈からは哲学者の西田幾多郎<sup>にしだきたらう</sup>が生まれてくる、民俗学と哲学の二つの流れは、私が研究している近代日本思想史を形作る重要な流れである。この二人がなぜ文通をする気になったのか、その一つの要因に、共通の友人として楚人冠の存在があったのではないかと考えている。熊楠に始まる民俗学の流れの最後に位置するのが折口信夫であるが、その折口と楚人冠は直接的な関係があったわけではない。しかし、折口の民俗学が一つの大きなビジョンをつかむにあたって、最も重要な役割を果たしたと推測される人物が楚人冠と非常に密接な関係にあり、楚人冠の教えを受け継いだ人物と考えられる、というのが今日の私の話の主眼である。

折口信夫というのは、どういう人だったか。一般的に言うと、民俗学者であり、国文学者である、ということになる。これが柳田国男と少し違うところで、折口は国文学、古事記・日本書紀や万葉集の研究者であった。人と神々の距離が非常に近い、あるいは人間のみならず様々なものに生命が宿っているという世界観が、古事記や日本書紀や万葉集に表れている。有名な言霊<sup>ことだま</sup>という概念、言葉が意味だけでなく生命の力そのものを伝える、というのも古代のものである。日本の文献は8世紀までしかさかのぼれない、その古代の事を知るには文献だけではだめで、見えない力がいろいろなものに宿る、ということを知るには今もアニミズム的な考え方で生きている人がいることを見ないといけない。だから折口信夫は、民俗学・国文学を自分の考察の中でクロスさせる。また、万葉集の歌人たちのことを知るため、自分自身も創作の道に入り、短歌を作り続ける。折口信夫は民俗学者にして国文学者である、研究者にして創作者である。そしてその大きな関心は、師匠の柳田国男に言わせれば、極東の日本列島の固有信仰であった。動物植物鉱物それぞれに生命が宿り、見えない力は生命を活性化するとともに表現も活性化する。これが原型になって、神道や仏教は固有信仰がその段階によってまとった言葉に過ぎない。古事記・日本書紀の段階で仏教は入ってきている。固有信仰を考える場合、神道と仏教は分けることができない、これが折口のユニークな視点を形作っていく。

折口は故郷を二つ持っている。一つは祖父につながる飛鳥坐神社<sup>あすかにいます</sup>、非常に古い神社で霊的な力の信仰に満ち満ちている。もう一つは折口家がある大阪の木津、新今宮のあたりである。折口の家から坂を上ると四天王寺にたどり着く。四天王寺は西門が極楽浄土の東門に通じるといわれ、中世にはハンセン病の患者などはここに死に場所を求めてやってきて、夕日を見ながら極楽浄土に生まれ変わることを願った、そういう土地である。だから折口は、神道と仏教、二つのルーツを持っていて、神道的な神がかりの要素と、浄土真宗に代表される、人間を超えた無限の力が死の瞬間に自分たちを極楽浄土に生まれ変わらせてくれる、そういう無限の力を自分たちが秘めているという要素、神道と仏教が融合したところに折口信夫は自分の古代学を打ち立てていく。

折口信夫は二つ名前を持っている。本名の折口信夫では『古代研究』という、自分の想像力を働かせる形で、国文学と民俗学の交点に自分なりの古代の原型を打ち立てた代表作がある。そして、短歌や有名な小説『死者の書』を書いた釈しやく迢ちよう空くうという名前がある。この名前が一体何を意味しているのか、生前ついに誰にも語らなかつた。浄土真宗の法名、死後の名前はすべて釈とつける。だから折口は、どう考えても死後の名前を自分のペンネームにしている。折口はそういう二重性、両義性を持った人である。

折口は日本の原型的な信仰として、南島の信仰に着目する。琉球王国最大の聖地で生まれ変わるのは、琉球王ではなく、琉球王の姉妹である神の声きこえを聞く女性、聞得大君おおきみである。ここから望む久高島くだかじまに住む女性たちは全員が神である。折口を感動させた久高島のイザイホーは、この島に住む女性たちが全員参加して、秘密の知識を先輩の女性から得る。12年に一度しか行われなため、折口は久高島のノロ（編注：琉球諸島の女性神役）から話を聞くことしかできなかった。一方では、女性たちが海のかなたから神を迎える儀礼と男性が神に変身する儀礼の両方に関心を払った。少年たちが秘密の洞窟にこもって、そこから汲んできた水を仮面(仮)にかけよみがえらせる、その仮面を身に着けることで永遠の命を持った祖先に変身する。こういう儀礼に折口は非常に大きな衝撃を受ける。沖縄には仏教があまり入っていないので、これが原初的な信仰なのだと、これについてはいろいろ議論があるが、折口はそう考えた。このような儀礼の中で、人は人を超えた存在に変身することができる、無限の存在・永遠の存在に祝祭を通じてなることができる、折口はこれが日本の宗教の根本にあると考えた。この点では岡本太郎が折口の後を追うことになる。

このような仮面祭祀は沖縄に限らない。こういった仮面を身に着けることで人間ではない存在に変身する、その存在はすべてを破壊する鬼のような強烈な力と、すべてのものに祝福を与える翁おきなのような二面性をもっている、これが民俗学と国文学を融合させた折口の古代学の一つの結論になっていく。海の彼方から何かやってくる、と見つくることによって人間としての私がなくなってしまい、そこから永遠・無限の存在が立ち上がってくる。こういうものが原初的な信仰であって、神道・仏教というのはそこに重ね合わせたものであり、だから神道的な憑依ひょういと、自分の中に無限の存在が秘められているという仏教的な考え方が根源になっているのだ、と折口は考えた。

折口信夫は、こういった祝祭の際に語られる言葉というのは人間の言葉ではなく神の言葉、神聖な存在が語りだす言葉で、祝祭をとおして人間と神は一体化し、その神は超越的な存在ではなく自分の中に秘められている、と考える。一般的には柳田国男の導きで折口はこういったところにたどり着いとされ、それは間違いではないが、柳田はここまでは語っていない。折口は一体どこで、当時の人類学・宗教学に近い知見を得たのか。実は折口の生涯には空白の時代がある。それが大学時代である。折口は、高校も大学も留年している。その間、何が起こったか全然記していないのである。大学の卒業論文が残っていて、それはマレビト論（編注：海のかなたの常世とこよか

ら時を定めて霊的存在〔神〕が来訪するという考え)の骨格である「神聖な言葉」についてである。神聖な言葉が話される時、人間的な言葉も神も、人間の内外も、対立がなくなってしまう境地が広がる。これは書くことが間に合わず友人に口述筆記したので、ものすごく点数は悪い。それで、大学に残る機会を逸してしまうのであるが、卒業論文の段階、柳田国男に出会う以前に、折口信夫の学問の体系、表現の体系はほぼ確立されている。では、その大学時代に何があったのか。

唯一、折口は自選年譜というものに、大学時代についてただ一言、藤無染<sup>ふじむせん</sup>という人物と國學院大學に入るときに一緒に暮らし始めた、藤無染は新仏教家だという記述を残してくれている。そこから私の新仏教の探求が始まった。どうも折口は大学時代に新仏教に触れていたようである。では新仏教の運動とはどういう運動か。これまでの迷信的な仏教理解を排して、近代的科学的側面から仏教の可能性を救い出していく、大乘仏教の重要な教えである如来蔵、仏になる可能性を自らの内に胎児のように秘めている、生きとし生けるものすべてが仏になることができる、このような理念をもう一度近代的によみがえらせて社会改革運動につなげていく、そういう運動である。

藤無染が新仏教家だという折口の記述を手掛かりに私が調べてみると、仏教だけではなく、キリスト教の中でも、キリスト教の迷信的なところを排してキリスト教が明らかにしてくれた唯一の無限の神とわれわれ人間との関係を探っていくという、ユニテリアンという一派の影響があるとわかった。これはまさに楚人冠と同じなのである。楚人冠が目指していたところと似たところに藤無染がいる。そこで、キリスト教の方を探してみようと青山学院に行ったところ、藤無染が残した本があった。小冊子『二聖の福音』と雑誌論文「外国学者の見たる仏教と基督教」である。藤無染は、鈴木大拙にも通じるころだがややオカルティックに、仏教とキリスト教は相反しない教えなのだ、阿弥陀如来や大日如来は人間的な存在ではなく宇宙の根源、キリスト教的な神であって、仏陀というのは無限の教えが人間の中に宿されたもの、まさにイエス・キリストと同じような関係である、神とキリストの関係は、阿弥陀如来や大日如来と人間的なゴータマ・シッダールタ(釈迦)の関係と等しいと考える。実際、キリストとゴータマ・シッダールタの言行録は似ているところがたくさんある。『二聖の福音』というのはゴータマ・シッダールタの言行録とイエス・キリストの言行録を比較したものである。

『二聖の福音』は新公論社から出版され、「外国学者の見たる仏教と基督経」は『仏教青年』という雑誌に載っていた。新公論社は、今はないが中央公論社から分かれ出た出版社である。『中央公論』はもともと西本願寺文学寮に集まった仲間たちが作った雑誌である。『仏教青年』は2年間だけ存在した高輪<sup>たかなわ</sup>佛教大学に集った先進的な仏教者・科学者の残党が作った雑誌である。『二聖の福音』は桜井<sup>さくらい</sup>義肇<sup>ぎちよう</sup>という人に捧げられている。桜井は、楚人冠を西本願寺文学寮に教師として呼んだ人物である。これは、と思い藤無染の生まれた寺を調べに行った。藤無染の遺品の中に、

杉村楚人冠本人が藤無染に贈った写真が残っていた。

「外国学者の見たる仏教と基督経」は、仏教とキリスト教の教えは等しく、両方とも精神と物質、人間の内と外の区別がなくなったところに救いが訪れると教えているのだ、という論考である。冒頭に引かれるのが当時の比較宗教学者、マックス・ミュラーの論考の翻訳である。これは実は、文学寮に着任した楚人冠が、最初に翻訳したものであった。楚人冠が日記に、これを訳したことを記してくれていた。だから、藤無染という、折口に大きな影響を与えた人物、男女の境を超えた恋愛を生きた折口のおそらく最初の恋人であっただろう人物の、教えの重要な師匠が、自らの写真にサインを書いて贈った杉村楚人冠であっただろうと思う。当時の楚人冠の日記を読んでいると、仏教の平等思想を背景に、社会主義的な運動に邁進している。マックス・ミュラーの「仏耶両教の一致」の訳で始まった「外国学者の見たる仏教と基督経」の最後は、伊藤証信いとうしょうしんの無我苑、および証信が説いた「無我の愛」で終わっている。仏教とキリスト教を同じようなまなざしの下でとらえているのである。

『二聖の福音』の方はポール・ケーラスというアメリカに帰化したドイツ人が書いた『仏陀の福音』という、仏陀の生涯をキリスト教の福音書になぞらえて書いた本に準じたものである。『仏陀の福音』は当時すでに翻訳があり、これを翻訳したのが鈴木大拙である。楚人冠と鈴木大拙、南方熊楠は密接な関係を持っている。南方と柳田の論争を経て折口に至る民俗学の系譜が生まれるが、それ以前に楚人冠を中心にして、鈴木大拙、南方熊楠、そして折口信夫に至る人間関係が作られていたことになる。だから、折口には比較宗教学的な視点、科学と宗教は一致するのではないかという考えがあり、さらに、人間はみな平等に人間を超える可能性を持っている、その瞬間には精神と物質、人間の内側と外側、主観と客観といったものがなくなってしまうような領域が開かれ、人間の言葉であると同時に神の言葉が立ち上がってくる、そんなビジョンを大学時代につかんでいたのではないかと考えられる。それは藤無染という、折口が大学を卒業する前に亡くなってしまった人物の影響ではないか。

藤無染は浄土真宗西本願寺派の僧侶である。釈迦空という名前は、おそらくこの藤無染が与えたのではないかと考えられる。私以前に作家の富岡多恵子さんがそこまで突きとめている。折口は仏教・神道を区別しないような地平で、宗教的な思考の原型、人間的な表現の原型を考えていったのではないかと思われる。

今日の演題は「杉村楚人冠から折口信夫へ」であるが、私は逆に、折口信夫を追って杉村楚人冠にたどり着いた。杉村楚人冠が開いた領域というのは、折口だけではなくて、鈴木大拙、南方熊楠を生み出したような世界に通じていると思う。大拙と熊楠とはまだ無名のころに文通を重ねている。楚人冠が二人にどれだけ関与していたかはわからない。楚人冠と大拙の交流はいったん切れて後年復活したともいわれているので、直接関与した可能性はないのかもしれない。しかし、

この二人が文通を交わして、一方は哲学、もう一方は民俗学につながっていることははっきりしている。外国にいながら文通をして、その中心が仏教だったのはなぜか。楚人冠以外に追えるもう一つのルーツは、シカゴ万博である。その冒頭、これからは精神的なフロンティアを世界のさまざまな宗教に共通するところに求めていかなければならない、という演説があり、世界宗教会議があわせて開催された。ここに鈴木大拙の師匠にして杉村楚人冠の師匠でもある臨済宗しやくそうの釈宗演えん、南方熊楠の文通相手で南方マンダラ（編注：南方熊楠が真言密教のマンダラをヒントに自身の思想に読みかえ、絵図を交えて説明したもの）誕生のきっかけになった土宜法竜どぎほうりゆうが、ともに参加する。これがアメリカと大乘仏教の初めての本格的な出会いになる。

鈴木大拙の使う霊性という言葉は、有名な著書の『日本的霊性』によれば、精神と物質を二つに分けないような領域を切り開いていく力だというのが、これは世界宗教会議で先輩たちが使っている言葉である。だから、おそらく楚人冠にも共有されている言葉だと思う。さらに、南方マンダラは中心に粘菌という動物・植物の性質を併せ持った原型的な生命体を置く。あらゆるものはこういった根源的な生命体から分化していき、人間を含む森羅万象あらゆるものは一つにつながりあっているのだから、そういう生命の在り方を考えるときにエコロジーという言葉を使わなければいけない。これはアメリカの哲学の中で磨き上げられた概念なのである。

鈴木大拙と南方熊楠は似たような読書傾向を持っている。英語の書物の系統でいうと、心理学、生物学、神智学というオカルティックな密教の系統を現代的に読み直したものを読んでいる。心理学でいうと、鈴木大拙が読んでいるのはウィリアム・ジェームズ、熊楠が読んでいるのはフレデリック・ウィリアム・ヘンリー・マイアーズ、複数の潜在的な意識からさまざまなメッセージが寄せられていてそれを私は感受している、深層の意識の方が大事でそこには無限の力が秘められているというもので邦訳は一冊も出ていない。マイアーズを読んだのは熊楠だけではない。柳宗悦も大学時代に読んでいる。大拙は10年以上アメリカにいて、帰ってきて最初に学習院で英語を教えるが、その最初の学生の一人が柳宗悦である。大拙はおそらく、比較宗教学的な、心理学的な、神智学に近いようなことを英語で教えていたのだろうと思う。柳宗悦は民藝という概念を作る前に、神霊学、無数にうごめく潜在意識の中に死後の世界に通じるような可能性があるということまで読み込んでいる。

それから生物学である。ありとあらゆるものは、根源的な、潜在的に可能性を持った生命の核のようなものから生まれてくるのだという、エルンスト・ヘッケルという人の本を読んでいる。この人が最初にエコロジーという概念を使う。そして古生物学者のエドワード・ドリンカー・コープという人は、生命はただ進化するだけでなく、一步戻ることがあり、それこそが生命の可能性そのものなのだとして主張する。これが、杉村楚人冠が側面支援した南方熊楠の神社合祀反対運動に使われる理論になる。

神智学を作ったブラヴァツキーという女性は、ロシアで密教を信仰している遊牧民カルムイクのごく近くで生活していた。ビアトリス・レーンという、鈴木大拙の妻になる女性も神智学を信奉していた。

近代日本思想の可能性は、柳田国男や折口信夫が追及した憑依の信仰、祝祭の場で人間は人間を超えた存在になれる、というところにある。理論としては鈴木大拙が霊性といった、人間は精神と物質の隔たりを乗り越え、人間の中には仏になる可能性が秘められている、という、大拙が説き続けた如来蔵にある。

杉村楚人冠をいう人を追うと、鈴木大拙、南方熊楠という二人の思想に打ち当たる、それはその二人だけではなくて、そのネットワークからさまざまに重要な教えが生まれ出ている、それは我々の伝統的な思考方法と、それを近代的によみがえらせるということを教えてくれると思う。これは南方熊楠、鈴木大拙、折口信夫、西田幾多郎すべてに共通していると同時に、それをジャーナリスティックに展開した人、その新仏教運動の起源に位置する人として、杉村楚人冠を位置づけられるのではないかと思う。楚人冠を追うことで、近代日本思想史のさまざまな流れがどういう相互関係を持っているのか、よく腑分けができる。南方熊楠や折口信夫は、人間的にはちょっと壊れている人である。だからこそ強烈に名前が残っているのではと思う。楚人冠は優秀で人間的に優れているので地味に思われているが、そういう楚人冠が一次資料を全部残してくれているので、いろいろなことがわかる。私も日記を読んで、楚人冠が文学寮でどういったことを行っていたのかわかった。日記がなければ文学寮でのことがわからなかった。新仏教運動がどのように生まれてきたかに関する一次資料も、これから歴史を正確なものに近づけるような資料が残っていると思う。



講演会の様子